

## 「ジュエリー現代 第3号」

1977年、伊藤一廣が雑誌「JEWEL」の中で書いた記事をここで紹介したい。その当時から約30年近く経った今でも、私は時々この文章を読み返す。今の時代をしても決して色褪せないこの文章は、70年代後半では、いったいどれほどの反響があったことだろうか。

これは私が伊藤から受け取った教科書と言っても過言ではない。

小西潤 2005年5月31日(火) 午前2時55分

### 「役に立たないジュエリー」 伊藤一廣

最近ある工芸展の審査の時、使いにくいという観点から、落とされた作品があった。そこで、改めてジュエリー・デザインにとって、機能性なるものが、はたして重要なことなのかどうかについて、考えてみたい。

日常生活の中で、毎日使われる食器や家具、衣服などは、まず第一に安全で使いやすくなければならない。その前提の上に立って、グッド・デザインなるものも生まれてくる。そしてそれは、民族によって生活習慣が異なるから、ある人種には便利でも、他の人種には不便なものになることにもなる。

先の工芸展の場合、そこでは明らかに、日本人の常識なるものが、その裏に顔を見せている。そして、日本人という単一民族の悲しさで、その常識なるものは巾が狭い。この狭い枠を取り払っていかない限り、自由な、あるいは多種多様な作品というものが生まれてくることは期待できないだろう。作品はいつでも、縦一本のレールの上で、レベルが高いか低いかを、うんぬんさせられるだけにすぎない。例えば、アメリカのように、さまざまな人種のいる所では、常識という枠がつかれないのと同じ理由で、種々雑多な作品が生まれてくるのではないだろうか。そこではお互いが理解し合えないことの方が多いから、作家は自分自身、個性的であることに迷いが少ない。

さて、ジュエリーの話に戻ろう。

ジュエリーは使いやすいものでなければならないかどうかという話であるが、機能第一と考えられる生活用品でさえも、一つの観点から良しとは決められないのであるから、いわんやジュエリーにいたっては、使いやすさ等という枠は考える必要がないと言える。重いブローチ、大きい指輪、大いに結構である。これは極端かもしれないが、あえて、声を大にして言いたい。そうしなければ、のびのびとした、やりたい放題の仕事など、生まれてこようはずがないのである。つけていて邪魔にならないジュエリーなど、あろうはずがない。そんなことは問題外の話である。邪魔な人はつけないがいい。邪魔な時は、はずせばよい。

ジュエリーがお金と同じ財産であり自分の持っている、ありとあらゆるジュエリーを全て身につけて、眠る時にも、それらはずさない人々も、この地球上にはいるのである。ドロボーはその腕を切り取って持っていくと聞く。その人々たちにとっては、重さは重いほどいいのである。それは貨幣をたくさん持っていることと同じなのであるから。また、ある人々にとっては、ジュエリーは魔よけのお守りであるから、片時も離せない。

ジュエリーの意味は、それぞれの人によってちがうのが当然である。

昔から、冒険好きの人間というのは、やっても何にもならない、むしろ損をする様なことを、命がけでやってきたのである。ムダなことに生命をかけるのが、人間の人間たるゆえんである。それは人間だけが持つ、ロマン、夢である。

ゆとりのない現代人は、役に立つことだけを喜ぶ。役に立つものだけを重宝がる。ゆとりのない現代社会は、役に立たない人間を置いてきぼりにする。この考え方こそが、人間を四捨五入する世界をつくっているのだ。こんな非人間的な話はない。日本に本当の芸術が育っていかないことと、福祉が立ち遅れていることとは、決して別の問題ではないのである。ムダを楽しむゆとりのないこの国では、便利なもの、便利なものへと、ものすごいスピードで進んで行き、つぎからつぎへと公害をばらまいていく。

「何の役にも立たないジュエリー」これをまず認める心があつてこそ、何にもとらわれない、新しい自由な仕事が育っていくのである。そして、それは人間だけが楽しむことのできる偉大な業なのである。

「このネックレスは、夏かけていても、汗で肌にべとつかないように、よく工夫されていますのよ。」こんな話なくそくらえである。